

子育て交流会を通じた学生の学び

著者	和田 幸子
雑誌名	京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究 紀要
号	55
ページ	245-252
発行年	2017-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000864/

子育て交流会を通じた学生の学び

和田 幸子

I. 実践の背景と目的

保育者を目指す学生は、実習やインターンシップで子どもと関わる機会を重ねる。一方、保護者との関わるの機会はほとんどない。平成20年告示の保育所保育指針では、子育てを社会全体で支えるべく第6章1,2節に、保育者の職務として保護者への支援があげられており、以来、子育て支援は保育者の重要な職務となっている。平成29年告示され、30年に施行されることになっている新たな保育所保育指針においては、「第4章 子育て支援」として取り上げ、保護者・家庭及び地域と連携した子育て支援の必要性を示している。幼稚園教育要領においても、地域における幼児期の教育のセンターとして子育て支援の役割が、現行に引き続き平成30年施行の新教育要領でも明示されている。子育て支援のためには、まず子ども理解を深めること、そして保護者を理解しようとする必要があるであろう。そこで学生がこれらの学修体験をする場として、学内で子育て支援事業に取り組んでいる保育者養成校もある。そこに参加する学生は、まず子どもとの関わりを経験する。子育て支援の必要性への気づき¹⁾、保護者対応の方法に気づき²⁾、その体験に成果を見いだしている。一方、そもそも学内での子育て支援事業においても学生と保護者との交流機会は不足しているとの指摘もある³⁾。しかし保護者側には、保育者養成校で行う子育て支援事業であるゆえ、保育者養成の一翼を担っているとの意識があることも明らかにされた⁴⁾。

本学では、学内で未就園の親子が集う光華こどもひろばを開催し、学生がスタッフとして参加している。ここで学生が関わった子どもとその親を授業に招き、

保護者との交流に重点を置いた機会を得ることによって、子ども理解と保護者理解を深められないだろうかと考えた。こうして子育て交流会実施に至った。その経過と学生が学んだことを報告する。本稿では、学内で行う子育て支援事業と子育て交流会の開催が、学生の子育て支援の学修において有意義であることを提示し、子育て交流会を継続開催するための実施案を提示することを目的とする。

II. 子育て交流会の開催

1. 光華こどもひろばと授業との連携

本学では、2012年度慈光館1階に保育実習室が設置され、以降、地域の親子が集う光華こどもひろばが開催されてきた。2014年度より授業との有機的なつながりを積極的に意図しつつ学生の参加をすすめてきた。具体的には、①年度ごとに光華こどもひろばとの連携科目を学科で定め、履修学生を7~10名ずつ順に参加させる、②当該授業の中で事前準備したことを光華こどもひろばにおいて実践する、③当該授業の中で事後報告を行う、という方法である。2014年度から2016年度の、連携科目は表1)の通りである。短期大学部こども保育学科は、2015年度より大学こども教育学部こども教育学科と改組したため、科目に配当学年を記しておく。なお、光華こどもひろばは短期大学部こども保育学科に引き続きこども教育学部こども教育学科の教員によって協同的に運営が為されている。

2015年度より平日開催日を水曜日午前と定め、土日も含めて年間20回を目途に開催日を決定している。

本稿で対象とする期間は2015年度後期から2016年度前期であり、対象学生は2015年大学入学生である。

表1) 光華こどもひろばとの連携科目

	2014年度	2015年度	2016年度
前期	保育相談援助 (短期大学部2年次)	児童心理学 (短期大学部2年次)	こども教育基礎演習A(大学2年次) 障害児保育(大学幼児教育コース2年次)
後期	障害児保育I (短期大学部1年次)	乳児保育 (大学幼児教育コース1年次)	乳児保育 (大学幼児教育コース1年次)

表1)の色がけで示したように、2015年度後期「乳児保育」(1年次)、2016年度前期「こども教育基礎演習A」(2年次)および「障害児保育」(幼児教育コース2年次)を光華こどもひろばとの連携科目として定めた。「乳児保育」と「障害児保育」は筆者単独の担当科目であり、授業内で事前学習、準備を行い、光華こどもひろばに参加し、事後にはアンケートおよびエピソード記録の記入をし、授業内で報告をさせてきた。その経過は図1)の通りである。各授業の光華こどもひろば参加の目的は表2)の通りである。

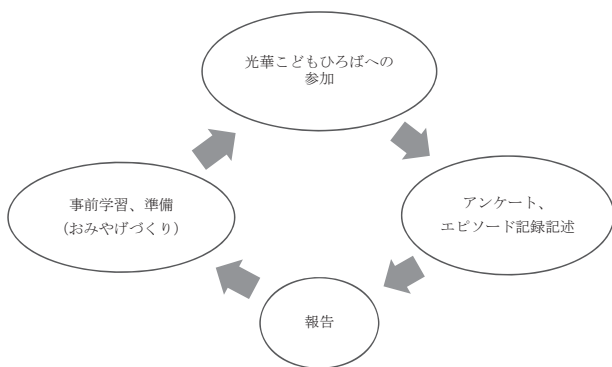


図1) 光華こどもひろばの参加と事前事後指導

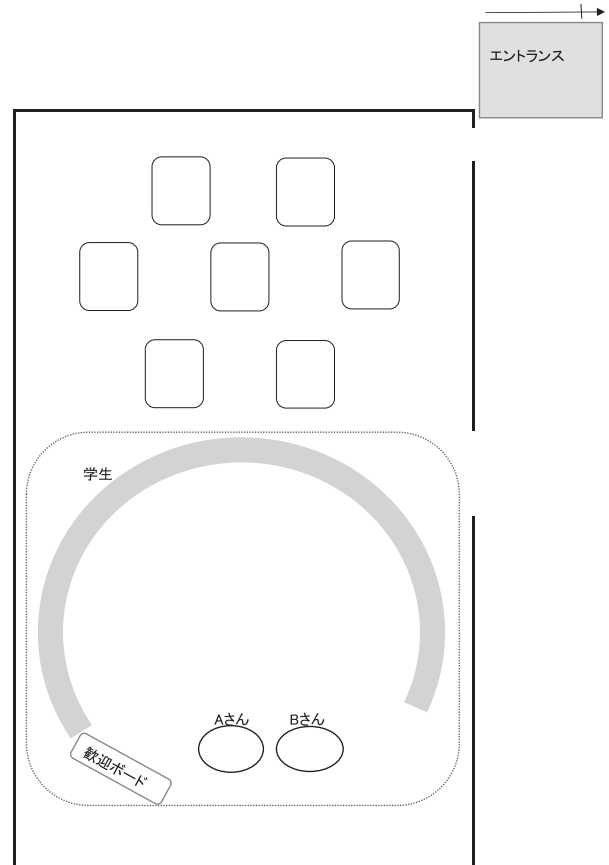


図2) 子育て交流会環境設定

表2) 光華こどもひろば参加の目的

授業	光華こどもひろば参加の目的
乳児保育 (2015年度後期)	0,1,2歳児の活動を観察し、子どもたちと関わる。
障害児保育 (2016年度前期)	0,1,2歳児の活動を共にすることによって、必要な環境設定、配慮を知る。

この他、土曜、日曜や長期休暇中の光華こどもひろばの開催にはボランティアで参加した学生もいる。つまり対象学生は2回以上、光華こどもひろばに参加したことになる。

2. 子育て交流会開催

2016年7月14日、光華こどもひろばに参加の親子2組を「障害児保育a」(27名出席)、および「障害児保育b」(25名出席)の授業に迎えた。保育実習室内でじゅうたんの上に乳児用のおもちゃを置き、遊ぶ子どもを見ながら懇談できるようにした(図2)。当日の授業タイムスケジュールは表3)の通りである。子育て交流会は、親子を迎えてからお礼をして終えるまで、a,bクラスともに45分間行った。

表3) 子育て交流会タイムスケジュール

障害児保育 a (2016年7月14日1講時)	
8:50	説明と環境設定
9:10	歓迎ボード作成と掲示
9:30	子育て交流会
10:10	お礼
10:15	リアクションペーパー記入
10:20	終了

障害児保育 b (2016年7月14日2講時)	
10:30	説明
10:40	子育て交流会
11:20	お礼
11:25	片づけ
11:35	お礼カード作成の相談
11:55	リアクションペーパー記入
12:00	終了

来会のお母さん(Aさん,Bさん)には事前に「自己紹介とお子様紹介」「出産の日を迎えるまで」「生まれてすぐ感じたこと」「子育ての日々」「楽しいとき」「しんどいと感じるとき」「助け手の存在」の内容で話し

て頂きたいと伝えていたので、お話を伺い、その後学生からの質問にもお答え頂いた。翌週の授業時には、学生が記入してきた感想を切り貼りし、Aさん、Bさん宛のお礼カードを作成し、送付した。

Ⅲ. 方法

子育て交流会の概要を記し、子育て交流会後に学生が記したお礼カードの記載内容から、学生の学びをまとめる。なお、Aさん、Bさん、学生には授業研究の一環として資料を使用することについて伝えた承を得ている。

Ⅳ. 結果

1. 子育て交流会の実際

① Aさんのお話の概要

Aさんの話の概要を記す。

男児a君(8ヶ月)の母親Aさんは、本学短期大学部こども保育学科の卒業生である。出産前まで保育士として勤務し1歳児クラスを担当していた。出産は定期的に痛みが迫り本当に苦しかった。長いお産の末、やっと我が子と会えた。子育ての日は授乳とおむつ替えて時間が過ぎる。近所に住む祖父の所に連れて行って気分を変える。笑っている顔を見たら嬉しいと思う。誰かに少しの間抱いてもらうだけで助かる。子どもの夜中のちょっとした声でも起きるようになった。明け方、子どもが先に起きたときに夫が相手をしてくれているとありがたいと思う。短大時代の先生に会いたいと思い、光華こどもひろばに参加した。人の気持ちを思いやれる子に育ててほしい。時期を考えて職場復帰をする予定である。保育園や幼稚園へ入園するとき、親は手放す寂しさや不安を感じていると思うので、そのような思いをくみ取って子どもを迎えてあげられる保育者になってほしい。

② Bさんのお話の概要

Bさんの話の概要を記す。

Bさんは男児b君(1才8ヶ月)の母親である。海外生活中に妊娠し、出産に関する十分な情報が得られない中、不安な気持ちを抱えながら過ごしていた。妊娠8ヶ月時に帰国、実家の助けを得て出産し、その後帰国した夫と共に京都での新生活が始まった。知り合いがいない環境で、子育てのことを聞く場もなく、子育ての仕方、子どもの成長について、不安がたくさんあった。困ったときは実家に電話をして聞いていた。光華こどもひろばのポスターを見て行ってみようと思いい、続けて参加するようになった。先生に話を聞いてもらい、少しずつ他のお母さんとも話ができるように

なってきた。おいしそうに食べている子どもの笑顔を見ると元気を得る。子どもの機嫌が悪くて当たられたり、やんちゃになってきたので子育てが辛いと思うこともある。夫は体を動かす遊びをよくしてくれる。

③ 質問したこと

筆者からは、出生時の身長、体重を質問した。正確にお答え頂いた。学生からは、「びっくりした出来事は」「子育てをされていて、この旦那さんで良かったなあとと思うことは」「お名前の由来は」「好きな食べ物は何ですか」「どんな子に育ててほしいですか」「もらって嬉しいプレゼントは何ですか」等、次々に質問があり、その都度Aさん、Bさんは丁寧に応えて下さった。

2. お礼カードの記載内容から見る学生の学び

「Aさん・a君への感想」「Bさん・b君への感想」としてそれぞれ4×9cmのスペースに記入し提出するようにした。提出は計52名である。学生らはイラストを入れながらAさん、Bさんに感想とお礼を語りかけるように記した。その内容をみると、①出産に関わる理解、②子ども理解、③子育ての現実、④育児支援の必要性について考えたこと、⑤育てる者の気持ちの理解、⑥保育者としての自らのあり方、保育者に求められる資質にまで及んで、計6項目にわけられると考えられる。

各分類項目の記載内容を下記にあげ、考察していく。

① 出産に関わる理解

52名の記載の内、出産に関わる理解に分類できる記載は9名に見られた。表4の通りである。

母胎の中に胎児がいることと、それに伴う身体の変化や心情についての話に、学生は心をとめている。また出産という出来事や出産直後の話から母性に支えられた忍耐を聞き取ることができた。生活の変化もふくめて、Aさん、Bさんの経験談に引き込まれて聞き入った。これらは学生にとっては未知のことであるが、興味を向けたことがわかる。

② 子ども理解

子ども理解に分類できる記載は8名に見られた。表5の通りである。

表4)「出産に関わる理解」に関する記載内容

分類項目	お礼カードの記載内容
出産に関わる理解	お腹の中で動いていることが、生きているという実感につながるという素敵な話でした。
	お腹の中で動いたり蹴ったりがあるときいたことはあったけれど、赤ちゃんのしゃっくりがわかるのは初めて聞きました。
	出産前、出産後の生活の変化、体質の変化について知ることができました。
	子どもが生まれる前から子どもへの愛情があることがわかりました。
	自分のお腹の中に命があるというのはどんな感じなのか、とても興味を持ちました。
	出産は予想以上に大変そうでびっくりした。
	ずっと喜びに変わるという体験談を聞くことができよかったです。
	つわりの話には驚きました。
ちゃんと育てられるか、無事に生まれてきてくれるか、生まれてきてくれたときは本当に嬉しかっただろうなと思いました。	

表5)「子ども理解」に関する記載内容

分類項目	お礼カードの記載内容
子ども理解	8ヶ月での体の成長や動き、表現仕方、泣き方など、この目で実際に見ることができました。
	なにが物やおもちゃを見つけるたび、興味を持ち、手に取り、口に入れて噛んでいる姿がとても印象的でした。
	どんなのがずりばいというかあまりわかっていなかったけれど、ずりばいをしているのを見て知ることができました。
	困ったときや泣きそうになったときすぐにお母さんの方へ向き直る姿がたまりませんでした。
	動きまわり、興味ある物には自分から進んで確かめに行ったり、またお母さんに甘える姿が印象的でした。
	もう大人と同じメニューを食べていることに驚きました。
	一番はじめにb君を見たときよりとても大きくなっていて、子どもの成長ってすごく早いのだと気付きました。
	積みあげたブロックを嬉しそうに倒していく姿がとても可愛かった。

乳児がどのように手足を動かし、周りのものに気づいて動きを進めていくのか、その発達過程と発達の意味については、「乳児保育」「障害児保育」の授業内で学修してきた。またその実際は、光華こどもひろばへの参加の際にも観察している。そして今回、子育て交流会で学生は上記のような気づきをした。落ち着いた雰囲気の中で、それぞれの子どもが母親のもとで遊ぶ姿は、年齢に応じた興味の表現であり、発達段階に即した動き方であった。また、「ずりばい」という言葉は知っていてもどのような動きなのかイメージすることができなかった学生にとって、目の当たりにして知ることができたという記述にあるように、学修したことと子ども実際の姿とが結びついた機会となった。母親との愛着関係を基盤として子どもが興味に応じて動いていく様子を見ることができた。

③子育ての現実

子育ての現実に分類できる記載は5名に見られた。表6の通りである。

子どもと一緒に過ごす時、母親は充実感を感じているのであるが、同時に子どもを基準とした生活になり自分の時間が無くなること、子どもの機嫌に対応していくことが難しいという現実のただ中を過ごしていることもわかった。子どもは一人の人として生きており、自我を発揮すべく育っていく。時には、力の限りのエネルギーで訴えることもある。泣き続ける場面では親は対応の難しさに困惑しながら、混乱状況を受け止めようと努力するしかない。学生は、子育ての現実には「大変」と記載しており、親の気持ちを十分に理解するには未だ至ってはいないが、Aさん、Bさんが語ったエピソードから、子育てには苦勞がたくさんあるということを知った。

表6) 「子育ての現実」に関する記載内容

分類項目	お礼カードの記載内容
子育ての現実	可愛い時もあり、大変なときもある事。
	生まれてから自分の時間が無くなると聞いて大変だなと感じました。
	赤ちゃんを育てるということはすごく大変なことだと改めて知りました。
	ニコニコしている時もあれば物を投げってしまう、泣いてしまうときなど大変、と思いました。
	何をすることも子どもを基準に、生活が変わったことを教えてもらいました。

④育児支援の必要性

育児支援の必要性に分類できる記載は4名に見られた。表7の通りである。

Aさん、Bさんともに、夫が育児に協力的である様子を聞くことができた。また、Aさんは近所に住む祖父母と毎日会うことで親子共々に気分転換をしている。Bさんは恒常的な援助を受けているわけではないが、育児に関する相談をするなど、祖父母の励ましがあることがわかった。このようなエピソードから学生は、子育てには家族、親族の支援が必要なことを理解した。また、地域の親同士の交流によって情報と励みを相互に得ることの必要性にも気づいている。親はそのような場に積極的に参加することが望ましいのであるが、大学が行う子育て支援の場として光華子どもひろばが地域に開かれる意義を見いだしている。

⑤育てる者の気持ちの理解

育てる者の気持ちの理解に分類できる記載は6名に見られた。表8の通りである。

Aさん、Bさん共に、我が子をいとおしく思う気持ちと、子育てのしんどさを話されたのであるが、それを受けて学生は、自分の親もこのような思いを抱えて育ててくれたのかと思いをはせている。子どもからの発信を受け止めるべく親が変わられていくこと、子どものために工夫すべく親が変わっていくことは、親として成長することであろう。このように学生は、育てる者の気持ちに着目した。

表7) 「育児支援の必要性」に関する記載内容

分類項目	お礼カードの記載内容
育児支援の必要性	子育てするにあたって、旦那さんやおばあちゃん、おじいちゃんの助け、支えがあるから成長できるのだとわかりました。
	もし自分が子どもを産んだら私も親の近くに住みたいと思いました。
	地域の人々との交流や、親同士が交流できる機会に積極的に参加することが大切であると思いました。
	光華子どもひろばが親同士子ども同士の交流を深められて新しい出会いがあり成長につながる場なんだと改めて気づくことができました。

表8) 「育てる者の気持ちの理解」に関する記載内容

分類項目	お礼カードの記載内容
育てる者の気持ちの理解	自分も両親に育てられるとき、母親は寝不足になりながらも、少しの成長でも喜んでくれていたのだと思う
	どれだけ疲れていて眠たくても子どもの小さな「おぎゃ」という声で目を覚ましてしまうと聞いて驚きました。
	自分の母親と重なる部分があり、母親も同じような不安を抱えていたのかと思いました。
	名前に込めた思いのお話がとても印象的でステキだと思いました。
	驚きと共に母親のパワーってすごいなと感じました。
	子どもの好き嫌いを子どもの行動を見て把握したり、工夫したりしてすごいと思いました。

⑥保育者としての自らのあり方

保育者としての自らのあり方に分類できる記載は8名に見られた。表9の通りである。

保育職に就く事への憧れを強くし、その責務の大きさを確認する機会となったようである。Aさんが保育士として乳児を担当していながらも、出産後初めて知った子育ての現実について話されたこと、親の気持ちを聞いたこと、子育て支援の必要性を理解したことによって、学生が保育職の責務とやりがいを自らの身に引き寄せて考える機会となった。

V. まとめ

授業での学修から学生の参加へと押し進めてきた光華こどもひろばに参加する親子との交流会の経過をたどってきた。親子を授業に招き子育てについての話を聞くことによって学生が学んだことをまとめ、子育て交流会開催の意味を考察していくことにする。さらに、今後子育て交流会を行う際の実施案と課題を提示する。

1. 子育て交流会開催の意義

普段の学校の生活や授業の中では知ることのできない事柄を聞くことができた、と学生はこの子育て交流会を有意義な機会と捉えた。第一に、未知である出産に関わる話を聞くことによって、学生は子どもが家族の祝福の中で生まれてきた存在であることを知った。目の前にいるAさん、Bさんの語りから、その子どもの存在の尊さを知ったのであった。第二に、母親の話に登場するa君、b君の姿を間近で見て、聞いた話

と結びつけることによって子ども理解を得た。第三は、Aさん、Bさんが我が子と向き合う中で、自らのあり方を変えられていったこと、つまり、子育ての日々は子どもと親との相互関係の中でお互いの主張を認め合い、折り合いをつけていくことの連続であることを知った。その過程では他者の援助や他者からのアドバイスを得ることが必要な場合もある。こうして子育て支援の必要に気づいたことが第四の意義である。

学生は自分の生き立ちを、「育てられる存在」「育ててもらった存在」、つまり子どもの立場から振り返る。そんな学生が保育者養成課程で自分より幼い子どもの育ちについて学んでいる。そして実習や光華こどもひろばで子どもたちと関わる時、「育てる存在」として自らの立場を位置づけようとする。子育て交流会では、「育てられる存在」のa君、b君が母親の見守りを受けて遊ぶ自由な空間で、母親として「育てる存在」になっていく最中のAさん、Bさんの語りを聞くことができた。このように親と子、両者の立場を認めながら話を聞く中で、学生自身が「育てる存在」になろうとするイメージを描くことができたと考えた。子育ての日々には相互のやりとりの中で、親も子も現在の姿に留まることなく変容していく。これこそが成長というものであり、この過程があるからこそ育てるという行為が尊いのである。学生はAさん、Bさんの話を聞いたことをきっかけに、自らを子どもの成長に関わる者として位置づけつつある。このように親と子、両者の立場を認めながら話を聞く中で、学生自身が「育てる存在」になろうとするイメージを描くことができたと考えた。これが第五の意義である。

表9) 「保育者としての自らのあり方」に関する記載内容

分類項目	お礼カードの記載内容
保育者としての自らのあり方	私も保育士を目指しており、子育てをとっても楽しんでおられるAさんが私の理想の姿だと思いました。
	保育という仕事の厳しさを改めて痛感しました。
	やっぱり保育士になりたいと思う気持ちが強くなりました。
	近頃、仕事と育児の両立をどのようにすればいいのか考える機会がとて多く、お話を聞いて少し安心しました。
	保育園で乳児を預かるのと、自分の子どもを育てるのでは違うと知り、子育てとは難しいものだなと感じた。
	幼稚園や保育園に通うまでは、ずっと一緒にいるため、預けるのはとても不安だということを知り、その気持ちをしっかりと理解してたいと思いました。
	保育者としても、親としても子どもと生活できることへの憧れが強まりました。
	少しでもお母さんの支えになれるような保育者になりたいと思いました。

2. 授業および光華こどもひろばと子育て交流会の有機的な連携

授業から光華こどもひろばへの有機的な連携を図ってきたのであるが、その中で子育て交流会という機会を設けた。これらの経過を整理し、子育て交流会を継続開催するための実施案を提示する。

①授業と光華こどもひろばとの有機的な連携

子育て交流会は、1年次後期から2年次前期の授業での学修と、そこから押し出されて光華こどもひろばに参加したことを通して、学生の中に芽生えつつあった子育て支援への問題意識を揺さぶるものとなった。成果を得ることができたその理由を経過から整理すると、以下のことがあげられる。一つ目は、授業「乳児保育」「障害児保育」において、子どもの育ちについて、また子どもの育ちを支え促す保育者の関わりについて学修していたことである。二つ目は、光華こどもひろばに2回以上参加したことによって、さらにはお互いに参加後の報告を聞き合うことによって、乳児の活動の実際を知り、関わり方について課題意識を持っていたことである。三つ目は2年生の前期末という時期に設定したことである。幼稚園での観察実習を終えた時期であり、ほっとしている一方、子どもたちをしっかりと見ながら関わることへ意識を向けつつあったことがあげられる。

本学の卒業生のAさんは、子どもと一緒に出かける場として恩師にも会える光華こどもひろばを選んだ。Bさんは、はじめ不安が強かったのであるが、毎回の光華こどもひろばに参加を続ける中で、子育てを楽しむように変わっていった。両者共に、光華こどもひろばに信頼を向けていると考えられ、自身の育児経験と光華こどもひろばが地域子育て支援の場として開かれる意義を、学生を前に語って下さると期待できた。Aさん、Bさんに依頼したのはそのためである。

以上のような学生側の基盤、語っていただくAさん、Bさんの条件をもとに、成果をもたらせたと考える。

②授業および光華こどもひろばと子育て交流会の有機的な展開

以下に、今後の子育て交流会実施案を提示する。授業から光華こどもひろばへの参加を経て子育て交流会を開催するというサイクルを、1年次後期と2年次前

期とで2回展開させる。つまり、時期をあけて子育て交流会を2回設定し、同じ親子を招く。そのことによって、子どもの縦断的な成長経過と、それに伴う子育ての喜び、不安、負担感の変化を知ることができると考えられる。図3のような展開イメージである。

3. 今後の課題

授業に來会した親子は、学生に囲まれ、学生に自らの経験を語る。子どもが自由に遊ぶ状況なのであるが、途中機嫌を損ねるなど、語ることへの集中が難しくなることもある。また、幼い子どもゆえに、当日に体調やその他の状況を整えて來校することに確認がもてない。しかし、それも含めて、子ども理解と、保護者理解を深める機会としていかなければならない。

子育て交流会を経て母親は、学生に一生懸命聞いてもらえた、子育ての経過を整理することができた、少しはお役に立つことができたという自己肯定感を得ていく。子育て交流会は、学生への成果のみならず、母親への励みにもなっている。相互の学びについて、考察していくことも今後の課題としたい。

引用文献

- 1) 矢萩恭子「2歳児保育室『あそびば〈ほこあ〉』における成果と課題～保育実践力養成と子育て支援の相互機能の側面から～」『田園調布学園大学紀要』第8号2013.pp.79-102.p.81
- 2) 小野真裕美「子育て支援としての常葉大学浜松キャンパス内親子教室において実践される保護者対応についての一考察」『常葉大学健康プロデュース学部雑誌』第10巻第1号2016.pp.115-122.p.122
- 3) 竹之下典祥・馬見塚珠生「学生の地域子育て支援ひろば実習から得られた保育養成の課題」『盛岡大学紀要』33巻2016.pp.43-52.p.46
- 4) 前掲書1) p.99

付記

- ・本稿はその一部を、第70回日本保育学会大会において和田幸子「子育て交流会を通じた学生の学び」として発表している。
- ・子育て交流会は「平成28年度右京区まちづくり支

援制度」の支援を受けて実施した。

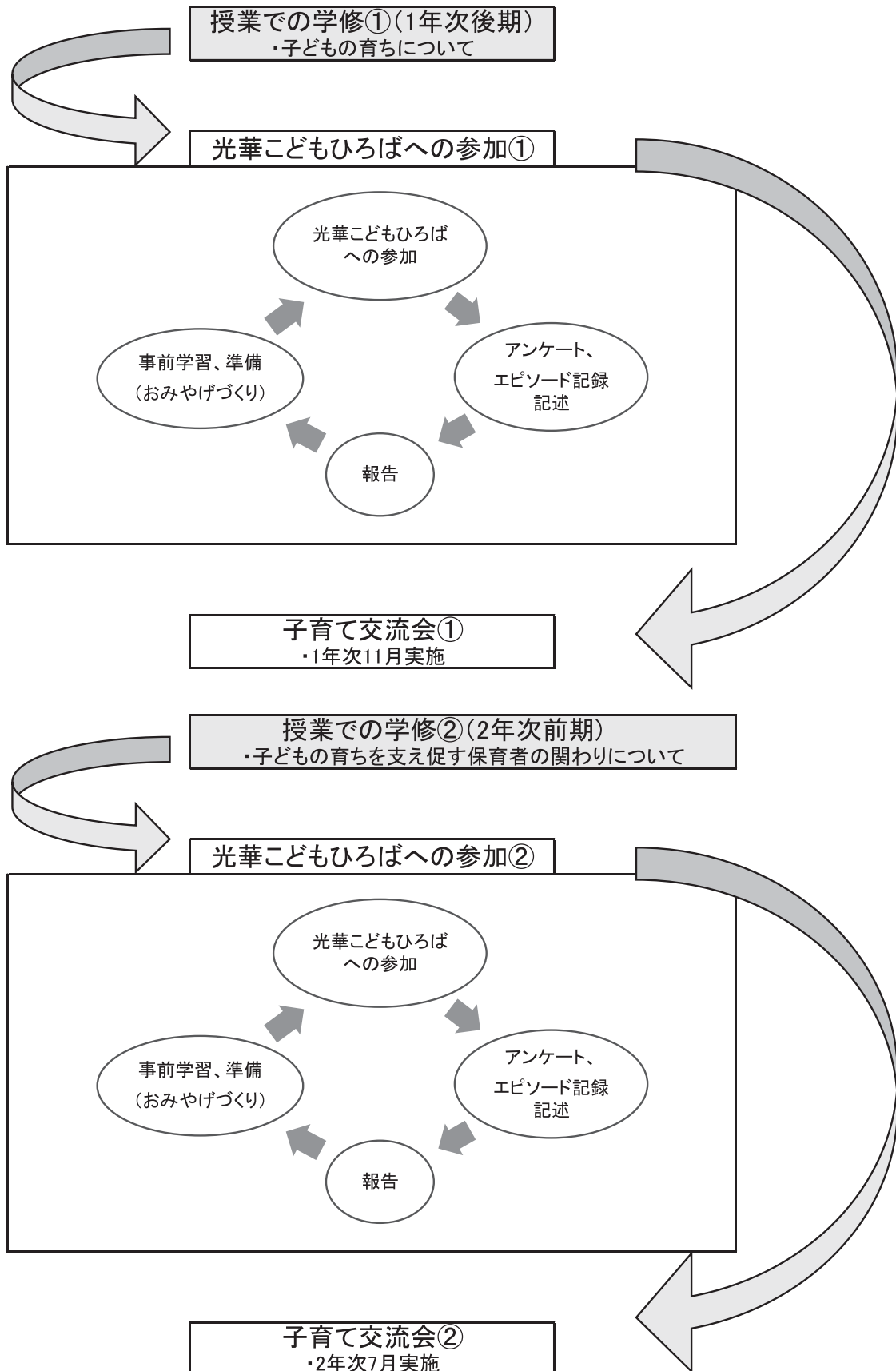


図3) 授業および光華こどもひろばと子育て交流会の有機的な展開 (案)